

## アインシュタイン・ベルクソン論争

アインシュタイン対哲学、🕒時間の本質をめぐって  
相対性理論のノーベル賞をアインシュタインが逃す  
原因となった論争の解明

# 目次

## 1. 🕒 アインシュタインとベルクソンの論争

### 1.1. 哲学の「大後退」

👤 歴史教授ジメナ・カナレス

## 2. 科学主義のための腐敗

### 2.1. ベルクソンの敗北と「科学」の勝利

### 2.2. 「明らかな間違い」とアインシュタインの「矛盾」

### 2.3. ノーベル委員会の告白

### 2.4. ノーベル委員会に対するアインシュタインの反応

### 2.5. 哲学への反発

## 3. 哲学者アンリ・ベルクソン

### 3.1. ベルクソンの「持続」：🕒 時間としての持続

### 3.2. パリ講演会におけるベルクソンの応答

### 3.3. ベルクソンのアインシュタイン相対性理論ノーベル賞取り消しへの働きかけ

## 4. 意図的な敗北

### 4.1. 「創造的進化」対ダーウィンの進化論

### 4.2. ベルクソンの世界的名声

### 4.3. アインシュタインとベルクソンの論争

### 4.4. 👤 哲学からの自立を目指す科学：ニーチェの指摘

### 4.5. 哲学の自己隷属：科学主義への屈服

#### 4.5.1. 👤 エマニュエル・カントの「アポディクティックな確実性」

#### 4.5.2. 👤 ルネ・デカルトの「我思う、ゆえに我あり」

#### 4.5.3. 👤 科学主義のための「裏切り」：エトムント・フッサール

### 4.6. 哲学の支柱へ：ベルクソンの昇格

## 5. 腐敗


<https://jp.cosmicphilosophy.org/einstein-vs-philosophy/>

## 第1.章

# アルベルト・アインシュタイン対哲学

## 時間の本質

そして哲学の「大後退」が科学主義にもたらしたものの

1922年4月6日、パリで開催されたフランス哲学会（Société française de philosophie）の会合で、アルベルト・アインシュタインは、ノーベル賞ノミネートによる世界的名声を新たにしたばかりで、著名な哲学者たちの集まりの前で相対性理論に関する講演を行い、彼の新理論により  時間の本質に関する哲学的思索は時代遅れになったと宣言した。

アインシュタインの冒頭の一撃は直接的で侮蔑的だった。相対性理論の哲学的含意についての質問に答えて、彼はこう宣言した：

“ 「Die Zeit der Philosophen ist vorbei」

翻訳：

「哲学者の時代は終わった」

アインシュタインは講演を次の論で締めくくり、哲学の排除を確定した：

「物理学の時間とは異なる、心理学的時間だけが残る。」

アインシュタインの劇的な哲学否定は、ノーベル賞ノミネートにより、世界的に大きな影響を与えた。

この出来事は科学と哲学の歴史における最も重大な事件の一つとなり、「哲学の衰退」の時代の到来と科学主義の台頭を印すことになった。

## 第1.1.章

# 哲学の「大後退」

哲学は、著名なフランス人哲学者アンリ・ベルクソンによって最も顕著に代表される繁栄期を経験していた。彼の生涯の仕事は🕒時間の本質を中心としており、アインシュタインの講演の聴衆に座っていた。

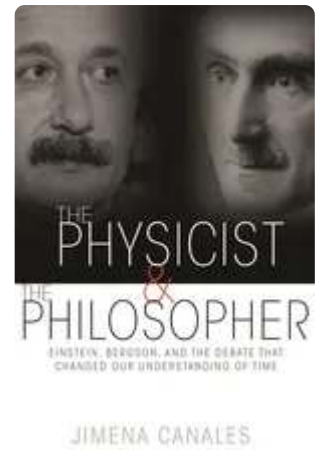
アインシュタインとベルクソンの間で引き続き起こり、彼らが亡くなる直前の最後のメッセージまで続いた長年にわたる論争は、歴史家が「大後退」と呼ぶものを哲学にもたらし、「科学主義の台頭」を助長することになった。



ジメナ・カナレス、この論争に関する本を書いたイリノイ大学の歴史教授は、その出来事を次のように述べた：

「20世紀最大の哲学者と最大の物理学者との対話」は、忠実に書き留められた。それは劇に適した脚本だった。その会合と彼らが発した言葉は、その後の世紀にわたって議論されることになる。

討論後の数年間で、... 科学者の時間観が支配的になった。... 多くの人にとって、哲学者の敗北は「直観」に対する「合理性」の勝利を象徴した。... こうして「哲学の後退の物語」が始まり、... その後、科学の影響が高まる中で哲学の関連性が低下する時代が始まった。



---

## (2016) この哲学者が相対性理論のノーベル賞を阻止した

物理学者と哲学者

出典: [Nautil.us](http://Nautil.us) | [jimenacanales.org](http://jimenacanales.org) (教授のウェブサイト)

## 第2.章



# 科学主義のための腐敗

この歴史的調査は、アンリ・ベルクソンが、哲学の数世紀にわたる独断的な科学主義への自己強制的隷属の一環として、意図的に討論で負けたことを明らかにするだろう。

ベルクソンはアインシュタインの相対性理論によるノーベル賞を取り消すことに成功したが、この行動は哲学に大規模な反発を引き起こし、「科学主義の台頭」を助けた。

ベルクソンは、1907年の著作「創造的進化」を通じて部分的に世界的に有名になった。これは、チャールズ・ダーウィンの進化論に対する哲学的対抗意見を提供した。この作品の批判的検証は、ベルクソンが

ダーウィン主義者に迎合するために「意図的に負けていた」ことを明らかにし、彼の人気を説明する可能性がある（章4.）。

## 第2.1.章

# ベルクソンの敗北と「科学」の勝利

ベルクソンはアインシュタインとの討論で負けたと広く認識され、世論はアインシュタイン側についた。多くの人にとって、ベルクソンの敗北は、形而上学的「直観」に対する科学的「合理性」の勝利を象徴した。

アインシュタインは、ベルクソンが理論を正しく理解していないと公に指摘することで討論に勝利した。アインシュタインの討論勝利は、科学の勝利を表していた。

ベルクソンは哲学的批判作持続と同時性（1922年）で「明らかな間違い」を犯し、今日の哲学者たちはベルクソンの間違いを「哲学にとっての大きな恥」と特徴づけている。

例えば、哲学者ウィリアム・レーン・クレイグは2016年にこう書いている：

20世紀の哲学の殿堂からのアンリ・ベルクソンの流星のような転落は、疑いなく部分的には、アルベルト・アインシュタインの特殊相対性理論に対する彼の誤った批判、あるいはむしろ誤解によるものであった。

ベルクソンのアインシュタイン理論の理解は、単に恥ずかしいほど間違っており、ベルクソンの時間観に不名誉をもたらす傾向があった。

(2016) ベルクソンは相対性理論について正しかった（まあ、部分的に）！

出典: リーズナブル・フェイス

## 第2.2.章

# 「明らかな間違い」とアインシュタインの「矛盾」

アインシュタインは公の場ではベルクソンの理論理解不足を攻撃しながら、私的には同時に彼が「それを理解していた」と記しており、これは矛盾である。

1922年後半、4月6日のパリでの討論から数か月後、日本への旅行中に彼は日記に次のような私的メモを書いた：

*Bergson hat in seinem Buch scharfsinnig und tief die Relativitätstheorie bekämpft. Er hat also richtig verstanden.*

翻訳：

「ベルクソンはその著作において相対性理論を知的に深く批判した。したがって彼はそれを理解していた。」

出典：カナレス、ヒメナ。『物理学者と哲学者』、プリンストン大学出版、2015年、p.177。

先に引用した歴史教授ジメナ・カナレスは、アインシュタインの矛盾する行動を「政治的」な性質のものと特徴づけた。

アインシュタインの矛盾する私的メモは、腐敗の兆候である。

## 第2.3.章

# ノーベル委員会の告白

ノーベル委員会の議長 スヴァンテ・アレニウスは、世論や科学的合意から逸脱した影響力が働いていたと認めた。



「パリの有名な哲学者ベルクソンがこの理論に挑戦したことは秘密ではないだろう。」

歴史教授ジメナ・カナレスは状況を次のように述べた：

その日のノーベル委員会の説明は、確かにアインシュタインにベルクソンとの紛争を引き起こしたパリでの[彼の哲学否定]を思い出させた。

ノーベル委員会には、アインシュタインの相対性理論によるノーベル賞を拒否する論理的根拠がなかった。

ノーベル委員会には、形而上学的哲学を擁護したり、世論や科学的合意に逆らったりする制度的傾向はなく、そもそもアインシュタインをノミネートしたのは委員会自体だった。したがって、彼らの決定は自組織の信頼性に悪影響を与えた。

その後、ノーベル委員会は科学界から激しい批判に直面した。

## 第2.4.章



## ノーベル委員会に対するアインシュタインの 反応

相対性理論のノーベル賞の代わりに、アインシュタインは光電効果に関する研究でノーベル賞を受賞した。

アインシュタインはノーベル賞授賞式で相対性理論について講演することで応じ、それによってノーベル委員会の決定を侮辱し、声明を發した。

アインシュタインの、光電効果によるノーベル賞の授賞式の最中に相対性理論を講義するという劇的な行動は、当時の世論の感情に訴え、哲学にとって知的損失をはるかに超える道義的損失をもたらした。

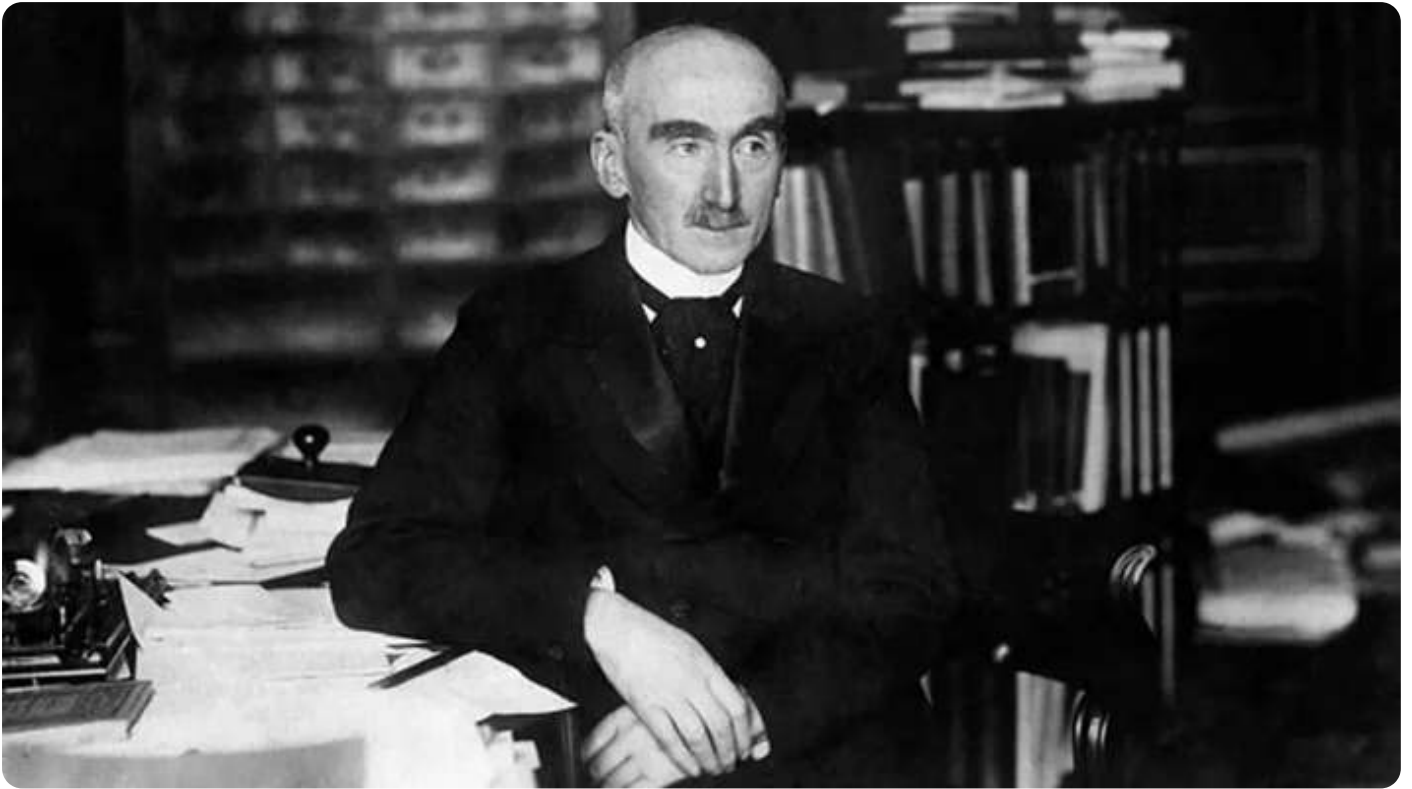
### 第2.5.章

# 哲学への反発

世論がアインシュタインに味方していたにもかかわらず、「「著名な」哲学者アンリ・ベルクソンによる批判」を理由にアインシュタインの相対性理論のノーベル賞を取り消したことは、科学が哲学から離脱する道義的な正当性を与えることになった。

本調査は、ベルクソンの「恥ずべき誤り」にもかかわらず、アインシュタインの私的メモがベルクソンの理論に対する実際の理解を捉える上で主導的な視点と見なされるべきことを明らかにする。これはベルクソンが仮定された「科学のより高い利益」（ダーウィニズム及び関連する科学主義）のために「意図的に負けた」ことを示唆しており、その特徴は1907年の彼の著作創造的進化ですで見られた。

## 第3.章



# 哲学者アンリ・ベルクソン

**フ**ランスの哲学教授アンリ・ベルクソンは、世界的に有名な哲学者でありフランス知識界の巨人（アカデミー・フランセーズ会員、1927年ノーベル文学賞受賞者）として、哲学史上最も傑出した哲学者の一人として広く認識されていた。

### 「世界で最も危険な男」

哲学者ジャン・ワールはかつてこう述べた：「四大哲学者を挙げるとすれば、ソクラテス、プラトン——両者を併せて——デカルト、カント、そしてベルクソンと言えるだろう」。

哲学者ウィリアム・ジェイムズはベルクソンを「精巧な天才、おそらく現代で最も優れた人物」と評した。

哲学者兼哲学史家エティエンヌ・ジルソンは、20世紀の最初の三分の一は「ベルクソンの時代」だったと断固として主張した。

歴史学教授ヒメナ・カナレスはベルクソンを次のように描写した：

ベルクソンは同時に「世界で最も偉大な思想家」であり「世界で最も危険な男」と見なされていた。

ベルクソンの生涯の仕事は持続 (la durée) (時間としての持続) を中心としており——これは生きられた質的な時間の概念である。

ベルクソンにとって時間は離散的な瞬間の連続ではなく、意識と絡み合った連続的な流れであった。アインシュタインが時間を方程式における座標に還元したことは、人間の経験に対する深い誤解として彼に映った。

アインシュタインの講演会で、ベルクソンはアインシュタインに直接挑んだ：

「物理学者にとって時間とは何か？ 抽象的な数値的瞬間の体系である。しかし哲学者にとって、時間は存在そのものの構造——私たちが生き、記憶し、予期する持続 (durée) である。」

ベルクソンは、アインシュタインの理論が「空間化された時間」という派生的な抽象概念のみを扱い、生きられた経験の時間的現実を無視していると論じた。彼はアインシュタインを測定と測定対象を混同し

ていると非難した——それは実存的結果をもたらす哲学的誤りであると。

1922年、ベルクソンは『持続と同時性 (Durée et Simultanéité)』を出版し、アインシュタインの相対性理論に対する緻密な批判を展開した。

この本は、アインシュタインが「哲学者の時代は終わった」と宣言したパリでの討論に対する直接の応答であった。本の表紙は一般的な意味でアインシュタインに言及し、「アインシュタインの理論について」と題されていた。



本書の序文は以下の一節で始まる：

（本書の最初の文）この著作の起源についての若干の説明が、その意図を明らかにするだろう。... 私たちがこの物理学者に抱く称賛、彼が新たな物理学だけでなく新たな思考法ももたらしたという確信、科学と哲学は異なる学問分野であるが互いを補完するためにあるという考え——これらすべてが私たちに対決を試みる欲望を呼び起こし、さらには義務さえ課した。

本書は1922年の初版を物理的にスキャンしたコピーに基づき、ベルクソンの言語的意図と微妙なニュアンスを保存するために最適化されたAIによる42言語への翻訳で、当サイトの書籍セクション<sup>(1)</sup>に掲載されている。各段落では、AIを使用して元のフランス語テキストを調べるオプションが提供される（段落にマウスをかざすことで）。

<sup>(1)</sup> アンリ・ベルクソン著「持続と同時性」（1922年）は、当サイトの書籍コレクションで42言語で公開されている。こちらからダウンロードまたはオンラインで閲覧。

### 第3.3.章

## ベルクソンのアインシュタインインノーベル賞取り消しへの働きかけ

討論後の数年間、ベルクソンは隠された「権威のネットワーク」を通じて積極的に影響力を行使し——このネットワークが彼に「世界で最も危険な男」の称号を与えていた——ノーベル委員会に迫り、アインシュタインの相対性理論ノーベル賞を却下させようとした。

ベルクソンは成功し、彼の努力はノーベル委員会議長による個人的勝利に結実した。議長はベルクソンの批判がアインシュタインの相対性理論ノーベル賞却下の主な理由であると「認めた」：

「パリの有名な哲学者ベルクソンがこの理論に挑戦したことは秘密ではないだろう。」


「著名な」という表現と「パリ」への言及は、ノーベル委員会がベルクソンの個人的影響力と地位を彼らの決定の正当化として利用していたことを明らかにしている。

## 第4.章

# 意図的な敗北

ベルクソンはアインシュタインの相対性理論を理解できなかったのか？

本調査の著者は、2006年からオランダの批評ブログ


 [Zielenknijper.com](https://www.zielenknijper.com)を通じて長年自由意志を擁護してきた。彼は哲学者ウィリアム・ジェイムズの研究直後の2024年にアンリ・ベルクソンの研究を開始した。

著者は偏見なくベルクソンを読み、ベルクソンが自由意志の擁護に「強力な論理」を提供すると想定していた。しかしベルクソンの「創造的進化」（1907年）を読んだ後の第一印象は、ベルクソンが「意図的に負けている」ということだった。

## 第4.1.章

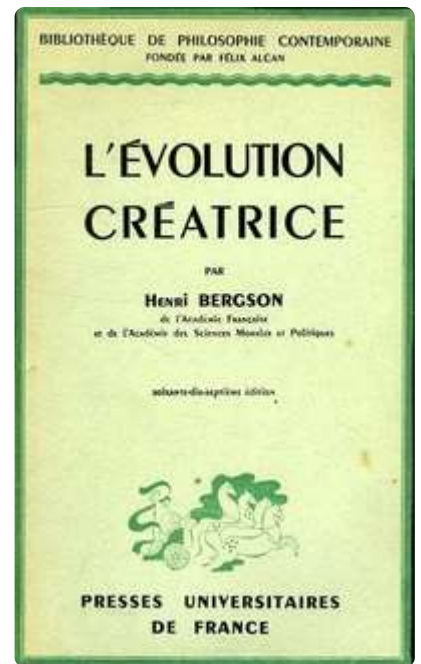
# 「創造的進化」対ダーウィンの進化論

ベルクソンの著書『創造的進化』は、当時チャールズ・ダーウィンの進化論に対する哲学的対抗としての公衆の関心に応えた。

著者の第一印象は、ベルクソンが両方の読者層——ダーウィンの進化論の支持者（より一般的には科学者）と  自由意志の信奉者——に迎合しようと意図しているということだった。結果として自由意志の擁護は「弱く」、いくつかのケースでは著者は意図的に負ける明確な「意図」を認めた。

ベルクソンは明らかに、本の早い段階で「ダーウィニスト」に安心感を与え、本の終盤で彼らが勝者として登場するように仕向けようとした。そのために彼自身の論理的議論に「明白な矛盾」を仕込み、自身の理論を根本的に弱体化させた。

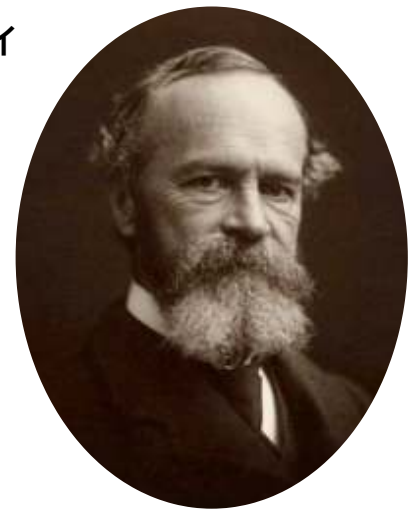
著者の最初の仮説は、一般大衆の間で支持が高まっていたチャールズ・ダーウィンの進化論に配慮しつつ自著の成功を確保しようとしたベルクソンの意図であり、これが科学の台頭に支配された世界でベルクソンが世界的名声を得た一因である。



## 第4.2.章

# ベルクソンの世界的名声

ベルクソンの世界的名声は、アメリカ人哲学者ウィリアム・ジェイムズによる「お礼」としての支援が一因かもしれない。ジェイムズは自らの哲学を阻んでいた重大問題を解決する手助けとなった——単独では「ささやかな知的貢献」と見なしうる——ベルクソンの業績に対して感謝の意を込めて支援したのである。



ウィリアム・ジェイムズは、自ら「絶対者との戦い」と呼ぶ闘いを展開していた。これはF・H・ブラッドリーやジョサイア・ロイスのような観念論者に対抗するもので、彼らは究極の实在として永遠不変の絶対者を主張していた。

ジェイムズはベルクソンを、「絶対者」の概念に終止符を打った哲学者と見なした。ベルクソンの抽象化批判と、流動性・多様性・実践的経験への強調は、絶対者の実体化を打ち破る道具をジェイムズに提供した。ジェイムズはこう記している：

ベルクソンの哲学への本質的貢献は、知性主義（絶対者）への批判である。私の見解では、彼は知性主義を回復の余地なく決定的に葬り去った。

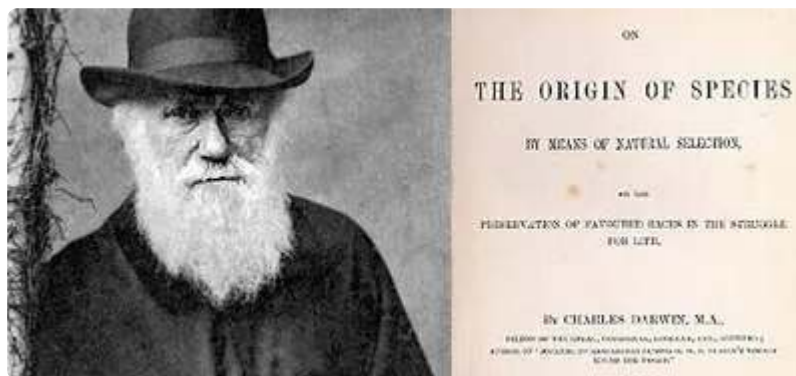
20世紀初頭、ベルクソンの業績がフランス国外でまだ広く知られていなかった時期に、ジェイムズはベルクソンの思想を英語圏に紹介する決定的な役割を果たした。

執筆活動や講演を通じて、ジェイムズはベルクソンの思想普及を助け、より広範な聴衆の関心を集めた。ベルクソンの評価と影響力は、ジェイムズの庇護を得た後の数年間で急速に高まった。

## 第4.3.章

# 科学の台頭

ベルクソンの世界的名声の飛躍は、科学の台頭とチャールズ・ダーウィンの進化論の流行と時期を同じくしていた。



チャールズ・ダーウィンの進化論

キャリア初期にダーウィン進化論への哲学的対抗軸を構築したことで、ベルクソンは「哲学からの科学解放」運動の最前線に立つこととなった。この運動について哲学者フリードリヒ・ニーチェは1886年の著作『善悪の彼岸』（第6章「我々学者たち」）で次のように記している：

科学者の独立宣言—彼の哲学からの解放は、民主主義の組織化と解体のもたらしたより繊細な副産物である：今や学者の自己称賛と自己満足は至る所で頂点に達し、最高の春を迎えている—ただし自己賛美が芳しいとは限らない。ここでも大衆の本能は「あらゆる主人からの解放を！」と叫び、科学がかつて「侍女」として長く仕えた神学に対して幸先よく抵抗した後、その無分別と軽率さのままに今度は哲学に法則を定めようとし、自ら「主人」役を演じようとしている—何ということをも！自力で哲学者を演じようとしているのだ！



科学は自らの主人となること、哲学からの離脱を志向していた。

#### 第4.5.章

### 哲学の自己隷属：科学主義への屈服

デカルト、カント、フッサールの著作からアンリ・ベルクソンの現代に至るまで、繰り返し現れるテーマがある：哲学を科学主義に隷属させようとする自己強制的な試みである。

例えばエマニュエル・カントの「アポディクティックな確実性」概念は、必然的に真であり疑いえない知識を指し、より具体的には空間と時間の実在性（非論争性）への信念に関するものである。これは独断的に採用され、彼の哲学全体の基盤を根本的に形成している。

カントのアポディクティックな確実性の概念は、単なる「強い主張」を超え、絶対的で疑いようのない真実の主張であり、宗教的教義に類

似している。カント研究者たちは、この概念の基盤となるカントの理性観について次のように記している：

カントが理性そのものについて論じたことはないことに注意すべきだろう。これにより困難な解釈的課題が残されている：いったいカントの一般的かつ積極的な理性観とは何なのか？

まず注目すべきは、理性があらゆる判断——経験的判断も形而上学的判断も——における真実の仲裁者であるというカントの大胆な主張である。残念ながら、彼はこの考えをほとんど展開せず、この問題は驚くほど学界であまり注目されてこなかった。

## カントの「理性」

出典: [plato.stanford.edu](http://plato.stanford.edu)

宗教と同様に、カントは「理性」の根源的本質に取り組むことを怠り、存在の根本的な神秘を絶対的真理の主張に悪用した。これはカント哲学プロジェクトの冒頭で明確に表明された目的——科学を「疑いえない」 確実性で基礎付けること——に照らせば、**独断的科学主義**を確立する「意図」の証拠となる。

『**純粹理性批判**』（第1版序文 - 1781年）：

「人間理性は、その知識のある種において、**理性そのものの本性によって課された**（現代のカント研究者によればカントが直接論じたことのない、存在の神秘に等しい）疑問に悩まされるという特異な運命を負っている。理性はこれらの疑問を無視できず、またそのすべての能力を超えているため答えられない... 純粹理性それ自体の批判こそが... 現在最も重要な課題である。それは形而上学を科学とし

て確立するための予備的学問として、その主張を独断的かつ数学的  
確実性をもって示せなければならない...」(A vii, A xv)

存在の神秘の同様の悪用は、ルネ・デカルトの有名な主張「コギト・エルゴ・スム」(「我思う、ゆえに我あり」)にも見られる。これはカントのアポディクティックな確実性と同様に、科学を基礎付けるための疑いえない真理を確立しようとするものだ。

「哲学の支柱」であるエトムント・フッサールの仕事では、「確実性をもって科学を基礎付けること」への志向が最初から掲げられている。フッサールは後年、この主要目的——科学の基礎付け、すなわち実際には「科学が教義を通じて哲学から離脱するのを可能にすること」——に奉仕するために、自らの過去の哲学から深く逸脱した。同時代人や学者たちはこれを「裏切り」と評した。

セバスチャン・ルフト(『文化の空間』、2015年)：「フッサールの超越論的転回...は知識の絶対的基礎を見つける必要性に動機づけられていた...この基礎は超越論的自我にしか見出せない...この動きは彼のミュンヘンとゲッティンゲンの弟子たちによって、『論理研究』の記述的・前理論的態度の裏切りと受け取られた。」

## 第4.6.章

# 哲学の支柱へ：ベルクソンの昇格

ベルクソンが科学主義の推進のために意図的に「負ける」戦略的能力と、著作創造的進化(1907年)を通じた哲学からの科学解放運動の最

前線への位置取りこそが、彼の実際の哲学的貢献よりも、ベルクソンが哲学の支柱へと昇格した理由かもしれない。

ベルクソンが受賞したノーベル賞は哲学ではなく文学の分野であり、それは戦略的な執筆能力の評価であった。

議論フォーラム「I Love Philosophy」で、ある哲学者が状況を洞察する次の質問を投げかけました：

「当時「存命中で最も天才的な人物」とされた例を見せてほしい。ベルクソンの有名で驚異的な超天才哲学の実例を示してほしい。」

---

(2025) **アインシュタインの哲学**

出典: アイラブ哲学フォーラム

これらの質問は明らかにしようとした：ベルクソンが「史上最高の哲学者」だったという考えを正当化する証拠は存在しない。

## 第5.章

# 腐敗

ベルクソンの「哲学にとっての大いなる恥」が歴史的に「哲学の大いなる後退」を引き起こしたのは、偶然ではなかった可能性が高い。

アインシュタインの私的メモに見られる矛盾した行動は、章 2.2. で明らかにされているように、腐敗の兆候である。

本調査は、ベルクソンが「討論を意図的に負けた」ように見えることを明らかにした。これはいわゆる「科学のより高次な利益」（ダーウィニズムと関連する科学主義）のためであり、1907年の彼の著作創造的進化に既に見られた特徴である。





# CosmicPhilosophy.org

<https://jp.cosmicphilosophy.org/>

印刷日: 2025年11月22日

その他のプロジェクト:

- ▶ [🦋 GMODEbate.org](https://gmodebate.org/): 優生学、科学主義、「哲学からの科学の解放」運動、「反科学」という言説、そして現代的な形の科学異端審問の哲学的基盤を調査するプロジェクト。